

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 岩田温子 訳

第4回 心の声にしたがって

高鳳蓮さんの初期の作品は、1980年代の中期から1990年代の初期に創作された作品をさします。この頃の作品は基本的には、題材の写実だったり形を誇張したもので、心の赴くまま自在に剪った素朴な内容ながら味わい深く人間味が溢れています。

陝北の農村では剪纸を窓花と呼び、一般的には草花や家畜、小動物などを剪って家に飾り付け、単調な窯洞の戸口や窓を明るくし、単一な黄土高原の風景に華やかな色どりを添えます。他には衣服や靴に施す刺繍の型紙として使い、またあるいは宗教や祭祀にかかわるものとして、人々の暮らしや社会への期待と憧れなどを窓花に託します。当時の剪纸のなかで、ちょっと複雑なものとしては、誰かの子供が病気になると剪る抓髻娃娃(頭に髻を結び、両手に鶏を持った子供の姿をした神様)がありました。病気や災いを去らせる目的に使われたのです。普遍的なものとしては、生年の干支の剪纸がとても人気があります。干支は必ず誰かが持っているのです。毎年吉祥の気持ちを込めて贈るととても喜ばれるのです。

1984年の末、突然、高鳳蓮さんの身に災難が降りかかりました。二番目の娘が出産時の大出血で亡くなったのです。自宅での出産で、誰もがこのような大事態にどのように対処してよいのかわからず、ただ慌てふためくばかりでした。まだ20歳の若さでした。

高鳳蓮さんが知らせを聞いて駆けつけたときにはすでに遅く、死に目に会うことは出来ませんでした。これまでの苦労の年月はなんとか乗り越えてくることが出来ましたが、この次女の死だけはどうしても受け止めることが出来ませんでした。その後、2年もの間、高鳳蓮さんは人が変わったようになり、殆ど人と話を交わすこともなくなり、用事の無いときはただ静かに座り、自分ももっと早くに着いていたら娘を助けられたのにとひたすら自分を責めるばかりでした。

人の世の最大の苦しみは親が子をあの世へと送ることです。このとき以来、高鳳蓮さんは生活への関心が薄くなり、

生きることに意味がないという暗い気持ちにいつまでも覆われてしまいました。

1986年、県の文化館が剪纸の学習班を立ち上げました。子供たちに勧められ、気分を晴らすために学習班に参加をするようになりました。学習班では、たくさんの虎の剪纸をつくりました。その年はちょうど寅年だったのです。他

の多くのものとは違った一幅の剪纸がありました。それは四角い図形のなかに4本の蹄で飛ぶように走る虎でした。虎の上には人が乗っています。よく見るとそれは長い髪をお下げにした女性です。虎のお腹の下には白い雲のような一輪の蓮の花が漂っています。(左図)

高鳳蓮さんが深い思いの中で説明をしてくれたところによると、これは次女のことを考えながら剪ったものだという事です。高さんは毎日、若くして亡くなった娘が飛虎に乗って天国へ行き、やがて自分と会える日を極楽で待っていてくれることを心の底から祈っているのだそうです。一幅のごく普通の剪纸が高鳳蓮さんによって濃い人情の彩りを与えられ、聞く人を感動させてやみません。

高鳳蓮さんの剪纸は、現実の生活体験や心の中のさまざまな想念などを、比喩や象徴を用いて剪り出したもので、その中には先祖から受け継がれて来た風俗や知識が

織り込まれています。

このような形式は陝北の黄河流域の地区ではごく普遍的なものです。その頃、高鳳蓮さんは基本的には干支を主な題材とし、干支の動物を剪っていました。彼女は実際の形にこだわって剪ってはいませんが、その本質を良く掴み、表情を上手く捉えています。例えば、馬年には馬を剪りますが、とても生き生きと、飛び跳ねる四肢は伸び広がり、大きく飛び上がり、威風凛凜とし、元気に満ち溢れています。

1992年は申年で、高鳳蓮さんは人間味のある猿の剪纸



娃娃騎虎



丑のついた馬

高鳳蓮さんの初期の作品は、1980年代の中期から1990年代の初期に創作された作品をさします。この頃の作品は基本的には、題材の写実だったり形を誇張したもので、心の赴くまま自在に剪った素朴な内容ながら味わい深く人間味が溢れています。

陝北の農村では剪紙を窓花と呼び、一般的には草花や家畜、小動物などを剪って家に飾り付け、単調な窯洞の戸口や窓を明るくし、単一な黄土高原の風景に華やかな色どりを添えます。他には衣服や靴に施す刺繍の型紙として使い、またあるいは宗教や祭祀にかかわるものとして、人々の暮らしや社会への期待と憧れなどを窓花に託します。当時の剪紙のなかで、ちょっと複雑なものとしては、誰かの子供が病気になる剪る抓髻娃娃(頭に髻を結び、両手に鶏を持った子供の姿をした神様)がありました。病気や災いを去らせる目的に使われたのです。普遍的なものとしては、生年の干支の剪紙がとても人気があります。干支は必ず誰かが持っているの、毎年吉祥の気持ちを込めて贈るととても新：多くの剪紙は四角であり、その図案は蜜といえは風を通さず、祖といえは、馬も走りぬける。居と実が互いに引き立てあい、互いに補い合っている。

奇：一切下絵を描かず、細かい部分も鋏で切り、鳳の髻、鶴の羽、龍の鱗、獅子の毛、どれも軽々と鋏で剪り出す。

怪：造型は全て動物、家禽で表され、人物も猿の顔である。仙人から貰った長寿の桃を食べる猿によって、人間の祖先を遡りながら吉祥の雰囲気を図る。

絶：作品の多くは二つの四角がつながっているものである。広げると目が眩むほどである。一幅、一幅はまるで石刻の壁画のようであり、それぞれの造型は青銅器に見られる伝説上の怪獣や戦の神の形から変じたものと思われる。』

喜ばれるのです。

1984年の末、突然、高鳳蓮さんの身に災難が降りかかりました。二番目の娘が出産時の大出血で亡くなったのです。自宅での出産で、誰もがこのような大事態にどのように対処してよいのかわからず、ただ慌てふためくばかりでした。まだ20歳の若さでした。

高鳳蓮さんが知らせを聞いて駆けつけたときにはすでに

遅く、死に目に会うことは出来ませんでした。これまでの苦労の年月はなんとか乗り越えてくることが出来ましたが、この次女の死だけはどうしても受け止めることが出来ませんでした。その後、2年もの間、高鳳蓮さんは人が変わったようになり、殆ど人と話を交わすこともなくなり、用事の無いときはただ静かに座り、自分ももっと早くに着いたら娘を助けられたのにとひたすら自分を責めるばかりでした。

人の世の最大の苦しみは親が子をあの世へと送ることです。このとき以来、高鳳蓮さんは生活への関心が薄くなり、生きることに意味がないという暗い気持ちにいつまでも覆われてしまいました。

1986年、県の文化館が剪紙の学習班を立ち上げました。子供たちに勧められ、気分を晴らすために学習班に参加をするようになりました。学習班では、たくさんの虎の剪紙をつくりました。その年はちょうど寅年だったのです。他の多くのものとは違った一幅の剪紙がありました。それは四角い図形のなかに4本の蹄で飛ぶように走る虎でした。虎の上には人が乗っています。よく見るとそれは長い髪をお下げにした女性です。虎のお腹の下には白い雲のような一輪の蓮の花が漂っています。(左図)

高鳳蓮さんが深い思いの中で説明をしてくれたところによると、これは次女のことを考えながら剪ったものだという事です。高さんは毎日、若くして亡くなった娘が飛虎に乗って天国へ行き、やがて自分と会える日を極楽で待っていてくれることを心の底から祈っているのだそうです。一幅のごく普通の剪紙が高鳳蓮さんによって濃い人情の彩りを与えられ、聞く人を感動させてやみません。

高鳳蓮さんの剪紙は、現実の生活体験や心の中のさまざまな想念などを、比喩や象徴を用いて剪り出したもので、その中には先祖から受け継がれて来た風俗や知識が織り込まれています。



拉手娃娃